

『中央学術研究所紀要』第44号抜刷  
平成27年11月15日発行

日本における宗教間対話と連携の実際  
—媒介としての教団付置研究所懇話会を中心に—

西 康 友

# 日本における宗教間対話と連携の実際

—媒介としての教団付置研究所懇話会を中心に—

西 康 友

- 1 はじめに
  - 2 立正佼成会と Buddhist-Christian dialogue
    - 2.1 立正佼成会の宗教間対話 –庭野開祖の事績を中心に–
    - 2.2 立正佼成会の主要組織・関連施設の構築と Buddhist-Christian relations活動
    - 2.3 最近の宗教間対話・国際平和活動について
  - 3 教団付置研究所懇話会の概要
  - 4 教団付置研究所懇話会活動を媒介とした Buddhist-Christian relations
    - 4.1 年次大会概要
    - 4.2 第7回教団付置研究所懇話会年次大会
    - 4.3 第8回教団付置研究所懇話会年次大会・テーマ「自死について」
    - 4.4 生命倫理研究部会
    - 4.5 自死問題研究部会
    - 4.6 宗教間対話研究部会
  - 5 まとめ
- 【謝辞】
- 【参考文献】
- 【付録】 I 教団付置研究所懇話会設立趣意書（全文）  
II 天谷忠央「幸 日出男先生に感謝をこめて」

## 1 はじめに<sup>1</sup>

日本における宗教事情を述べよう。日本総人口約1億3,000万人のうち、キリスト教系に属する人々が約300万人（約2%）であり、仏教系に属する人々は約71%、神道系に属する人々は約84%である<sup>2</sup>。日本人は、同一人物であっても、例えば仏教徒でもあ

---

1 本稿は2015年6月25-30日、ドイツ・St. Ottilien 修道院において開催された European Network of Buddhist Christian Studies の議題要請に基づき作成した英文原稿に加筆・修正したものである。

2 文化庁編「第2表 全国社寺教会等 宗教団体・教師・信者数」、『宗教年鑑 平成26年度』、文化庁、2015年3月20日 34-35。

り氏子でもあるというように、多宗教が混在し共存している。筆者は、この奇妙な事情について、仏教系や神道系ではキリスト教やイスラーム教における一神教と違い、多くの神々を認めることや、古来より和を尊ぶ日本人の特性にあるのではないかと考えている。このことから、日本では仏教とキリスト教との間には深刻な争点は存在せず、良好な宗教間対話が行われていると思っている。両宗教間では積極的な対話がなされているが、それだけでなく宗教に関係する社会的問題が発生した場合には、協力してその解決に尽力できるだけの深い信頼関係が構築されている。

日本における「Buddhist-Christian dialogue」は1960年代に庭野日敬・立正佼成会(RKK)開祖(庭野開祖)の関連活動から開始したと言えるだろう。RKKは、庭野開祖の開顕した法華経の本義に基づき、在家仏教の精神に立脚し、菩薩道の実践をとおして、人格の完成並びに家庭・社会・国家及び世界の平和境の建設に貢献することを目的とした在家仏教教団である。庭野開祖は教団内活動において極めて重要な「法座」活動を展開し、日本国内に教会組織を構築して、会員綱領<sup>3</sup>(1963年)に基づき佼成会会員を導いた。1951年に結成した日本国内で新しい宗教団体の連合体である新日本宗教団体連合会(新宗連)の第2代理事長に就任(1965年)し、諸宗教者と協力して日本国内における宗教間対話の新しい局面を切り開き、その後国際的な宗教活動を展開してきた。庭野開祖とRKKは、国内外において宗教間対話を推進してきたが、観念的な事柄だけに捕らわれず、実際の活動に結実するように組織・施設の構築をしている。宗教間対話を議論する場としての雑誌「Dharma World」の刊行<sup>4</sup>、および国際平和・宗教間対話活動を経済的に支援する庭野平和財団創立<sup>5</sup>等をした。1965年9月、仏教徒として初めて第二バチカン公会議第4期開会式特別ゲスト参加として招待され、ローマ教皇パウロ六世と個別謁見した。このことを契機に、庭野開祖は「Buddhist-Christian dialogue」の重要性をより一層認識した。その後、「カトリックを含めたすべての宗教を結ぶかけ橋になろう」と世界宗教者平和会議(WCRP<sup>6</sup>)創設の決意を固め、その設立に邁進することとなった。

庭野開祖は1979年に宗教界のノーベル賞といわれるテンプルトン賞を受賞すること

3 立正佼成会会員綱領：立正佼成会会員は、本仏釈尊に帰依し、開祖さまのみ教えに基づき、仏教の本質的な救われ方を認識し、在家仏教の精神に立脚して、人格完成の目的を達成するため、信仰を基盤とした行学二道の研修に励み、多くの人々を導きつつ自己の錬成に努め、家庭・社会・国家・世界の平和境(常寂光土)建設のため、菩薩行に挺身することを期す。

4 参照、Dharma World Magazine URL：[http://www.rk-world.org/dharmaworld/dk\\_home.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dk_home.aspx)。

5 庭野平和財団ホームページ URL：<http://www.npf.or.jp/>；庭野平和財団編『平和への道を歩む庭野平和賞の人びと』、佼成出版社、1990年。

6 WCRPとは、World Conference of Religions for Peaceの略称であり、世界宗教者平和会議を指す。1970年に京都で創設された世界の主要な宗教代表者たちによる平和を指向する国際団体であり、国連経済社会理事会の諮問を受ける国連公認カテゴリーI(国際赤十字委員会などと同格)のNGO(非政府機関)である。

になるが、この受賞記念講演内容に宗教間対話・協力の原動力が、庭野開祖の祖父から受けた教訓<sup>7</sup>と釈尊の教えに起因すると述懐している。また庭野開祖は、神仏が善哉善哉(もうよろしい)というまで信仰を止めないと心に固く誓っていた<sup>8</sup>。筆者は庭野開祖がテンプルトン賞受賞について「神仏がこの道を行け」との神仏の証を頂いたと涙ぐむ映像を見ると、とても嬉しかったのであろうと思う。筆者も、このことを胸に、庭野開祖が提唱する世界平和の一助になれるよう、微力ながら努力をしてきた。その中の一つに以下で紹介する「教団付置研究所懇話会」の諸活動がある。

1990年代前半に日本では、臓器移植の是非を問うことに始まった生命倫理問題や、靈感商法・地下鉄サリン事件等の反社会的集団が宗教の名を悪用して社会混乱させるなどの大きな問題が多発して、日本の全宗教者・宗教教団の存立が問われる事態となった。この難題解決に向けて、当時のRKK/中央学術研究所(CARI)天谷忠央所長が日本キリスト協議会(NCC)宗教研究所幸日出男所長と連携して、日本宗教界の多数を占める仏教系を始め神道系やキリスト教系の教団に呼びかけ、教団付置研究所懇話会(懇話会)設置に尽力した(2002年)。この懇話会には19会員と8オブザーバーが所属<sup>9</sup>

7 庭野日敬「テンプルトン章受賞記念講演」(抜粋):私は、日本の北部にある新潟県の山の中の寒村で育ったのでありますが、私をかわいがってくれた祖父が、「どんなに小さな虫でさえも、自分で食べるくらいのはしているではないか。まして人間として生まれたからには、世のため、人のために役立つ人間にならなければいけない」ということを常々、私に言い聞かせると共に、自らも村人たちの苦しみ、悩みのために献身しておりました。その祖父の言葉と姿が、いつしか私の意識の底に染み込んだのでありましょう。後に私をして宗教の世界に目を向けさせる要因になったことは確かであります(庭野日敬「テンプルトン章受賞記念講演」、『庭野日敬法話選集別巻』、佼成出版社、1982年 11-19)。

8 庭野日敬『この道』、佼成出版社、1999年 287:(立正佼成)会の創立当初、妻が私に「お父さん、いつになったら信仰をやめるのですか」と、よく尋ねたことがあった。私は「お経文に空中から『善哉、善哉』という仏さまの声が聞こえてくるのが説かれてあるが、それが聞こえてくるまでは信仰をやめないよ」と答えたものだった。

9 教団付置研究所懇話会加盟研究所加盟研究所

#### 19会員研究所・団体

- |                           |                    |                   |
|---------------------------|--------------------|-------------------|
| (1) オリエンズ宗教研究所            | (2) 孝道教団国際仏教交流センター | (3) 宗教情報センター(真如苑) |
| (4) 浄土宗総合研究所              | (5) 神社本庁教学研究部      | (6) 世界仏教徒センター     |
| (7) 曹洞宗総合研究センター           | (8) 玉光神社           | (9) 智山伝法院         |
| (10) 中央学術研究所(立正佼成会)       |                    | (11) 日蓮宗現代宗教研究所   |
| (12) NCC(日本キリスト教協議会)宗教研究所 |                    | (13) 大本教学研究部      |
| (14) 金光教教学研究部             | (15) 浄土真宗本願寺派総合研究所 | (16) 真宗大谷派教学研究部   |
| (17) 天台宗総合研究センター          | (18) 天台寺門宗園城寺派     | (19) 中山身語正宗教学研究部  |

#### 8オブザーバー研究所・団体:

- |                  |                  |               |
|------------------|------------------|---------------|
| [1]真言宗豊山派総合研究院   | [2]新日本宗教団体連合会    | [3]世界救世教教学委員会 |
| [4]天理大学おやさと研究所   | [5]南山宗教文化研究所     | [6]辯天宗教理研究室   |
| [7]陽光文明研究所(崇教真光) | [8]臨濟宗妙心寺派教化センター |               |

して、諸宗教者間（とくに諸宗教教団の専門研究員）のネットワークを構築し、相互の立場への理解と情報の共有を進めつつ、相互協力・交流を深めている。

筆者に対して、European Network of Buddhist Christian Studies (ENBCS) から下記3点についての議題要請があった：

- (1) 仏教徒-キリスト教徒関係 (Buddhist-Christian relations) に関連して、どうい  
う問題があるか
- (2) 仏教徒-キリスト教徒関係 (Buddhist-Christian relations) に関連して、どうい  
う達成した成果があるか
- (3) 極めて微妙であったため無視されてきたか、あるいは避けられてきた仏教徒-  
キリスト教徒 (Buddhist-Christian) の出会いから誘起された事象があるか

筆者は、RKK/CARI 奉職者であり、教団付置研究所懇話会の（事務的）活動にも積極的に関与してきた。本稿では、これまでの筆者の知見・経験を基に RKK の宗教間対話活動と ENBCS の要請事項に着目しながら、日本における Buddhist-Christian relations について議論する。

ENBCS からの要請に関連して、1990年代から頻発した日本国内における下記4つの問題について、教団付置研究所懇話会における仏教とキリスト教との討論を紹介する。①日本国内における生命倫理問題を含めた臓器移植法：この問題は脳死問題も関係するので、宗教的生命観に関連する重要事項である。②自死問題：日本では、1990年代前半に年間2万人台だった自殺者が、2003年に最悪の34,427名を記録したのを頂点に、自殺者は連年3万人台を記録した。日本における自殺者は仏教徒のみならずキリスト教徒等にも亘っているので、この深刻な情況に全教団が一致してその対策を取ることが必要となった。③葬儀の問題：葬儀つまり身内の死に直面した場合に、家族が異なる宗教を信仰している場合、宗教・信仰の違いで対立することがある。この事項は仏教とキリスト教間に相当対立的な問題である。④宗教間対話：この事項は上記3点に対応するための方策を策定する段階で、必然的に行われている。

庭野開祖とその後の RKK の活動をより詳細に追跡すること、また上記の議論を通して、ENBCS からの要請事項に対する回答が得られると期待される。

本稿の第2章では RKK の諸活動を通しての Buddhist-Christian relations について議論する。第3章では1990年代に日本宗教団体が遭遇した重大な社会問題とそれに対処するために設置された教団付置研究所懇話会の概要を説明する。第4章では Buddhist-Christian relations について、懇話会年次大会 Proceedings と研究部会の活動資料をもとに詳細に議論する。

## 2 立正佼成会と Buddhist-Christian dialogue

庭野開祖の活動の根幹はあらゆる人々の救済と世界平和の実現にある。「平和への私の提唱」<sup>10</sup>において、(ガンジー翁を模範とする) 非暴力の証明・世界を一つにする宗教・対立を超えるための実践・西洋と東洋を合わせた人類の道・平和への献身が約束するもの・人類の意識変革のための宗教協力について詳しく論じている。庭野開祖の宗教間対話等の諸活動は全てこの思想の元に、揺らぐことなく推進されている。

本章では、RKK関連資料を元に、庭野開祖や主要スタッフの国内外の当該活動を年代順に追っていき、それと共に RKK の主要関連組織・施設の構築を記述する。

### 2.1 立正佼成会の宗教間対話 ー庭野開祖の事績を中心にー

RKKは1938年に開祖庭野日敬・脇祖長沼妙俊によって創立された法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団である。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりである(脚注3: 会員綱領参照)。RKK 会員綱領の実現に向けて、日本全国に多数の教会(国内: 238教会・380布教所、海外: 16教会・54布教所)を設置し、教会長・教会スタッフ・会員の密接な連携協力の下に活動を推進している。この活動の根幹が、RKKの救い救われの場であり、RKKのいのちともいわれる「法座」である。この法座は、会員の数人が集まり、その中の一人が人生苦を赤裸々に打ち明け、仏教の四諦の法門・庭野開祖の法華経解釈に基づいた教会幹部などの指導によって、問題解決をしていく場である。法座の構成員は相談者・指導者(法座主)・観察者(相談者・法座主のやりとりを観察するが、法座の場に参加しているこの人の苦も相談者と重なることが多く、相談者の苦を自分自身の苦として拝聴する者)である。これまで多くの人々が現実の苦から救われ、そしてそれを契機として真の信仰にめざめ、真の幸せをつかんでいる事例が多数ある。法座の中で、RKK会員が救われていくことを実感する度に、「法座」は現在でもRKK発展の基礎をなしていると確信する。この法座はRKK内での実践活動であるが、1973年に英国聖公会の最高指導者カンタベリー大主教マイケル・ラムゼー博士が庭野開祖を訪問した際にRKKの「法座」を見て、極めて高い実践活動であると次のように評価をしている<sup>11</sup>:「互いの信仰を深め、理解と信頼の連携である法座は、未来に開けるRKK活動の巨大なエネルギーを物語っている」。

この頃と同時期に、長期的視点から、RKKは深くキリスト教を研究する必要性を認識し、有用な人材を海外の大学・キリスト教系の主要研究機関に留学派遣した。彼ら

---

10 庭野日敬『平和への私の提唱』、佼成出版社、1984年。

11 庭野日敬『初心一生』、佼成出版社、1975年 248。

はキリスト教に関連した研究で派遣先から学位 PhD を取得している。後年、彼らは篠崎友伸・元 RKK 理事／元 CARI 所長を筆頭に、宗教間対話や国際平和活動において積極的に活動している。

これらと相前後して、1951年には新宗連が結成され、RKKも新宗連設立と同時に加盟している。庭野開祖が初めてキリスト教をはじめとする世界の諸宗教者と対話するのは、1955年に東京で開催された第1回宗教世界会議<sup>12</sup>である。庭野開祖もこの会議に参加し、世界の緊急課題が討議された。庭野開祖は1963年9月「核兵器禁止宗教者平和使節団」副団長として日本の宗教者達と共に欧米諸国を訪問し、ローマ教皇パウロ六世に平和提唱文を手渡している。

その当時、ローマ教皇庁はローマ教皇パウロ六世の主導の元に、「非キリスト教関係事務局」を設置して、キリスト教以外の宗教との対話に力を注ぎ始めた。仏教とキリスト教のそれぞれの変革活動の結果として、必然的に両宗教間の対話・交流の気運が盛り上がってきた1965年9月、庭野開祖は仏教徒として初めて第二バチカン公会議第4期開会式に特別ゲスト参加の招請を受け、パウロ六世と個別謁見し、宗教協力による世界平和への貢献を誓い合った<sup>13</sup>。庭野開祖の第二バチカン公会議出席が実現したのは、2つの理由による<sup>14</sup>:(1) RKKが教団創立以来わずかな年月の間に著しく伸びた教団であること、(2) RKK創立者が現存して活躍していること（会見情景等については、竹村のウェブページに生き生きと描かれている<sup>15</sup>）。

これを契機に、庭野開祖は「Buddhist-Christian dialogue」の重要性をより一層認識した。その後、「カトリックを含めたすべての宗教を結ぶかけ橋になろう」と世界宗教者平和会議（WCRP）創設に決意を固め、その設立に邁進することとなった。アメリカの宗教者からの呼びかけもあり、庭野開祖は日米諸宗教者京都会議（1968年1月22日、アメリカ側：キリスト教・ユダヤ教など諸宗教者14名、日本側：仏教・神道・教派神道・キリスト教・新宗教など諸宗教者30名）を他の諸宗教者とともに開催し、「平和のための世界宗教者会議」（のちのWCRP）を1969年（ガンジー生誕100年祭）か1970年

12 日本宗教者150名、海外からアメリカ・インドなど16カ国約40名の宗教代表者が参加。神道・仏教・キリスト教・教派神道・新宗教・カオダイ教・バハイ教などが一堂に会する画期的な会議であった（WCRP歴史編纂委員会編『WCRPの歴史—宗教協力による平和への実践』、WCRP日本委員会、2010年 39-40）。

13 ローマ教皇パウロ六世が庭野開祖へ述べた言葉：「あなたが宗教協力を熱心に進めていることは、よく知っています。これからも大いに推進してください。教皇庁でも異教に対する考え方が変わってきました。互いに認めあい、祈りあうことが必要です。宗教がたがいにたずさえて平和の道を歩むほかに、宗教者が人類に貢献する道はありません」（庭野日敬『この道』、佼成出版社、1999年 126-127）。

14 庭野日敬『私の履歴書』、日本経済新聞社、1982年 151。

15 Kinzo TAKEMURA, "The Founder and The Second Vatican Council", *Dharma World Magazine April-June 2006*, Dharma World Magazine Web Site: [http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw\\_2006ajvatican.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw_2006ajvatican.aspx).

(第二次世界大戦終結・国連発足25周年)に開催したいと呼びかけたところ、この提案は満場一致の賛同を得た。また、1969年には第20回国際自由宗教連盟世界大会(IARF<sup>16</sup>、ボストン)に出席、このときRKKは同連盟に加盟している。

各種準備実行委員会を経て、1970年10月16-21日に「第1回WCRP京都会議」が開催された。当会議には世界39カ国世界諸宗教指導者約300名が参集し、庭野開祖は共同議長、および日本宗教連盟国際問題委員会委員長・受入主催機関総責任者として、開会式のあいさつを務める。その後、RKKはWCRP日本委員会を主導してきた。

1978年には、庭野開祖は第1回国連軍縮特別総会で世界宗教者平和会議代表として演説した。「平和への私の提唱」を想起すると、この活動も一連の流れの中で自然な成り行きであることが理解出来る。この年には、第23回IARF世界大会(オックスフォード)に出席し、IARF副会長に就任した。1979年には、これらの一連の活動を評価されテンプレトン賞を受賞している。

現在、RKKは庭野開祖の遺志を継承し、国内外で宗教間対話・協力活動を継続して展開している。

## 2.2 立正佼成会の主要組織・関連施設の構築とBuddhist-Christian relations活動 佼成出版(1966年設置)と、Dharma World(創刊年月:1974年5月)を創刊

RKKは常に仏教の普遍的な人生観や世界観を社会に広め、後世に伝え残していくための組織として佼成出版社を設立した。その中で、Buddhist-Christian relationsを積極的に支援していく雑誌として、“Dharma World”(創刊年月:1974年5月)を創刊した。雑誌創刊の目的の冒頭にて「ダルマワールドは、日々の暮らしの中に生きる仏教を紹介し、世界平和に向けた宗教間対話の促進を目的とする英文季刊誌」と明記している。現在まで第42巻まで発行され、そのバックナンバーを調べると分かるように([http://www.rk-world.org/dharmaworld/dk\\_home.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dk_home.aspx))、上記目的に忠実に沿った編集方針を堅持している。雑誌は有能な編集長のもとに各巻のテーマを適切に選択している。このテーマ選択はDharma World編集委員会(RKK外務部長・次長、国際伝道本部顧問、中央学術研究所顧問などの有識者、Dharma World編集長・担当など)において決定され、RKKの宗教間対話路線とうまく連動している。この雑誌は国内外の多数のキリスト教

16 IARFとは、International Association for Religious Freedomの略称である。1900年にボストンで欧米のキリスト・ユニテリアンの指導者によって創設された世界最古の国際的宗教協力団体であり、前身の名称は「国際キリスト教自由宗教連盟」である。国連経済社会理事会の諮問を受ける国連公認カテゴリーI(国際赤十字委員会などと同格)のNGOである。現在は、本部事務局を英国オックスフォードに置き、ニューヨークとジュネーブに国連代表を、インド・フィリピン・アメリカに地域事務局を置いている。27カ国の75教団が加盟している国際的宗教協力団体である(URL:<https://iarf.net/>)。



系機関・仏教系機関・各宗教機関等に配布され、高い評価を得ている。

最近のキリスト教関係者からの投稿論文には下記の例がある：

- 来世：ホアン・マシア「聖霊の中に生きる―クリスチャンが考える死後の世界―」。<sup>17</sup>
- 東アジア平和共同体の構築と宗教の役割：山本俊正「『いのちの尊厳』と『平和への権利』―宗教者の協働を目指して―」。<sup>18</sup>
- 原子力と現代の宗教：マルティン・レップ「福島第一原子力発電所の事故と宗教者の責務」。<sup>19</sup>

#### 中央学術研究所設立（1969年設立）と宗教教団附置研究所の結集

中央学術研究所は、広く思想・文化・科学等との関連のもとに、宗教、特に仏教を研究し、以って有用な人材を育成し、人類の文化と世界平和への寄与を目的として、政治・経済・社会・文化等のあらゆる分野の学識経験者の協力のもと、“基礎研究”および“今日の課題”に方向を与えながらさまざまな研究活動を展開している研究機関である。天谷忠央・元 CARI 所長は、1990年代に多発した宗教教団の存在を脅かす重大事件・諸問題への対処を考えるに当たって、重要な役割を果たすことになる教団付置研究所懇話会立ち上げに貢献した。諸課題を克服しつつ宗教の危機を乗り越えて、社会と教団に貢献するための教団附置研究所間のネットワークを構築する構想を具体的に実現する人として、当時の幸日出男・NCC 宗教研究所所長を訪問し、依頼した。天谷の記事<sup>20</sup>からそのいきさつこそが、Buddhist-Christian relations そのものの典型例であることが分かる。

#### 庭野平和財団（1978年12月1日設立）

庭野平和財団は、創立40周年を迎えた立正佼成会の記念事業として設立された。庭野開祖と RKK は、これまで、国内では「新日本宗教団体連合会」をはじめ、「明るい社会づくり運動」を、長年にわたり提唱・支援してきた。国際的には、WCRPをはじめ IARF など、宗教協力を基盤とした平和のための活動を積み重ねてきた。平和を達成するためには、このような活動に特定宗教法人の枠を超え、宗教界の多くの人びと、

---

17 [http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw\\_2014julysept\\_life-in-the-spirit.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw_2014julysept_life-in-the-spirit.aspx).

18 [http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw\\_2014aprjune\\_on-the-sanctity-of-life-and-the-right-to-peace.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw_2014aprjune_on-the-sanctity-of-life-and-the-right-to-peace.aspx).

19 [http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw\\_2013octdec\\_the-tepco-nuclear-disaster-and-the-responsibilities-of-religions.aspx](http://www.rk-world.org/dharmaworld/dw_2013octdec_the-tepco-nuclear-disaster-and-the-responsibilities-of-religions.aspx).

20 T. AMAYA, “With My Feeling of Gratitude to Prof. Yuki Hideo”, *Japanese Religions*, Vol. 38 Nos. 1 & 2, *Special Issue in Memory of Prodeser YUKI Hideo (1926-2012)*, NCC Center for the Study of Japanese Religions, 2013, 5-7 (天谷忠央「幸 日出男先生に感謝をこめて」：【付録】Ⅱ)。

さらに広く社会の各方面で活躍する方々が参加し、衆知を集めて揺るぎない母体を作る必要がある。そのために財政的な基盤も築く必要がある。混迷の度を加える時代にあつて、こうした時代の要請から庭野平和財団が設立された。

同財団は、毎年庭野平和賞を選定し、宗教的精神を基盤とした平和のための思想、文化、科学、教育等の研究と諸活動、さらに世界平和の実現と人類文化の高揚に寄与する研究と諸活動への助成を行い、シンポジウムの開催、国際文化交流事業の推進など、幅広い公共性を有した社会的な活動を展開している。因みに第32回庭野平和賞(2015年5月)は「障壁なき女性たちのイニシアティブ」(Women Without Walls Initiative) 会長でキリスト教ペンテコステ派の牧師、エスター・アビミク・イバンガ師が受賞した<sup>21</sup>。

現在では、これらの RKK 関連諸組織・施設は庭野日鑽・立正佼成会会長の認可の元にそれぞれの事務局が運営をしている。RKKでは仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいる<sup>22</sup>。

### 2.3 最近の宗教間対話・国際平和活動について

日本国内では、「Buddhist-Christian dialogue」の一例として、「比叡山宗教サミット」がある。庭野開祖は第1回と同サミットに出席している。同サミットは「祈ることから平和がはじまる」ことをスローガンに、今年で28周年を迎える<sup>23</sup>。RKKはこれまで、同サミットに積極的な協力・支援してきた。「比叡山宗教サミット」とは、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の提唱により、1986年10月に世界の宗教指導者がイタリアの聖地アッシジに集い、それぞれの宗教儀礼で世界平和への祈りを捧げたことに起因を持つ。第1回は1987年8月に16カ国24代表が京都に、諸宗教代表者600名が参集し、世界宗教者平和の祈り式典を挙行し、互いの宗教間について理解を深めた。今年8月4日に世界の宗教者が比叡山に参集し、約1,100人の比叡山宗教サミット28周年「世界平和祈りの集い」が開催された。

RKKはWCRPが1970年に創設されて以来、教皇庁諸宗教対話協議会(PCID<sup>24</sup>)をは

---

21 庭野平和財団の諸活動についてはウェブページ <http://www.npf.or.jp> を参照。

22 立正佼成会英語ウェブサイト URL : <http://www.rk-world.org/> を参照。

23 比叡山宗教サミット URL : <http://www.tendai.or.jp/summit/outline/index.html> を参照。

24 PCID とは、Pontifical Council for Inter-religious Dialogue の略称である。1965年にローマ・バチカン教皇庁内に、「非キリスト教関係事務局」を設置したのが発端。キリスト教以外の諸宗教団体との対話を促進する機関である。

じめ、世界教会協議会（WCC<sup>25</sup>）、世界福音同盟（WEA<sup>26</sup>）、英国国教会<sup>27</sup>等のキリスト教諸団体との対話・協働を積極的に深めてきた。

これらの活動によって、数多くある成果のうちの一つ「多宗教世界におけるキリストの証・信仰の実践のための提言」<sup>28</sup>（2011年）を導くことになったのであろう。また、これはWCC、PCID、WEAの共同提言であって、それぞれのキリスト教協議会・同盟が仏教などとの諸宗教対話協力を推進してきたことが結実した一つであろうと考えられる。

### 3 教団付置研究所懇話会の概要

筆者は第1章で述べたように、RKK/CARI奉職者であり、教団付置研究所懇話会の（事務的）活動にも積極的に関与してきた。また、幸い設置者の一人である天谷忠央・元CARI所長より設立の経緯等について直接伺うことが出来た。本稿では、これらの筆者の知見・経験を基に懇話会について議論していく。

懇話会の設立は1990年代前半に日本宗教界を揺るがす数々の大事件が起こったことに起因する。例えば、臓器移植の是非を問うことに始まった生命倫理問題<sup>29</sup>（第4.4節参照）、靈感商法<sup>30</sup>（1990年、相談件数が最多を記録した）や地下鉄サリン事件<sup>31</sup>（1995年）が上げられる。後半の2事件は、反社会的集団が宗教法人格を取得したこと、ま

25 WCCとは、World Council of Churchesの略称で、世界的なエキュメニカル組織である。19世紀後半から20世紀初頭のエキュメニカル運動の成功により1937年に設立合意（正式な設立は1948年）した。スイス・ジュネーヴに本部を置き、世界120ヶ国以上340を超える教会・教派の会員が所属している。

26 WEAとは、World Evangelical Allianceの略称である。1896年イギリスで創設されたエバンジェリカル・アライアンスをもとに世界的発展してきた福音主義教会の世界連合体。1951年に現在の名称「世界福音同盟」となる。

27 16世紀のイングランド王国で成立したキリスト教会の名称。世界に広がる聖公会のうち最初の成立で、その母体となった教会である。

28 「多宗教世界におけるキリスト者の証：信仰の実践のための提言」日本語全訳 URL：<http://www.christiantoday.co.jp/articles/13986/20140905/christian-witness-in-a-multi-religious-world.htm>；立正佼成会公式ホームページ URL：[http://www.kosei-kai.or.jp/news/2013/10/post\\_2808.html](http://www.kosei-kai.or.jp/news/2013/10/post_2808.html)を参照。

29 2009年7月の可決の臓器移植改正法は、脳死を一律に人の死と定義している。脳死臓器移植の可否について、国民的合意がなく、国会でも死の概念・倫理に対する審議の時間は寡少であった。

30 悪徳商法的一种。靈感があるかのように振舞って、先祖の因縁や霊の祟り、悪いカルマがあるなどの話を用いて、法外な値段で商品売りつけるなど、不当に高額な金銭などを取るものである。

31 1995年3月20日に、東京都の帝都高速度交通営団で、宗教団体のオウム真理教が起こした神経ガスのサリンを使用した同時多発テロ事件で、死者を含む多数の被害者を出した。

たそれを可能にした宗教法人法の曖昧さが一般社会から非難された<sup>32</sup>。宗教教団と社会との関わりのあり方が問われる中、米国で2001年9月11日に「同時多発テロ」が起こり、この傾向に拍車をかけた。一般社会からの不信は、日本における宗教団体の存在意義に関わる大きな問題であった。

国内外のこれらの事件により、日本では現代社会の諸課題（生命倫理問題等）の解決、宗教教団の社会的責任の再確認、倫理観再構築が求められることとなった。個々の宗教者・宗教団体は、こうした大問題に対して、独力では対応しきれないと思われた。多くの宗教者は諸宗教者間（とくに諸宗教教団の専門研究員）のネットワークを構築し、相互の立場への理解と情報の共有を進めつつ、相互協力・交流を深化する必要に迫られた。これが諸課題解決・対応を宗教教団の協調・連帯のもとに可能とするべく、我々は多数の教団を包含した『教団付置研究所懇話会』を設立（2002年）した<sup>33</sup>（【付録】Ⅰ：教団付置研究所懇話会設立趣意書参照）。これらの協調・連帯活動を推進することを通じて、真の宗教性の復権を実現でき、宗教教団の社会貢献が可能となると考えられた。

懇話会運営の原則は、設立の背景と必要性から、必然的に情報発信の自由・機会の平等と公平・運営の民主性に基礎付けられる。懇話会の特徴は、その構成員と会費・事務局運営に現れている。護教的な立場に陥りやすい宗派の教団組織と異なり、懇話会構成員は加盟研究所・団体の研究員である。この結果、現代の諸問題に対して処方箋となる自由な情報の発信・提供が期待される。懇話会加盟研究所・団体の会費や事務局運営負担などが教団の規模に関係なく一律である。

懇話会の構成を図1に示す。教団に付置された研究所・団体が懇話会へ加盟しており、会員とオブザーバーがある。懇話会には年一回（9月、ないし10月）の年次大会があり、同日に総会が開催される。懇話会の分科会として3つの研究部会（生命倫理問題（第4.4節参照）・自死問題（第4.5節参照）・宗教間対話（第4.6節参照））が設置されている。研究部会会員は、有志の加盟研究所研究員である。

---

32 旧来の制度は、宗教団体の自由を広範に認め、促進するため、宗教団体の規制に消極的であった。反社会的団体の宗教法人資格取得を阻止し、既存の宗教法人のうち反社会的なものを見出すことを意図して、1996年に「宗教法人法」が改正された。こうした改定意図から、当時の議論は、もっぱら宗教の危険性を論じ、存在意義を問題としなかった。RKKは「宗教法人法改正問題に対する見解書」（1995年）（URL：[http://www.kosei-kai.or.jp/030katsudo/0301/post\\_151.html](http://www.kosei-kai.or.jp/030katsudo/0301/post_151.html)）の中で、規制の行き過ぎが信教の自由・政教分離の原則を侵犯する恐れがあることを指摘している。

33 懇話会の発足と同様な契機によって、国際宗教研究所宗教情報センター（URL：<http://www.rirc.or.jp/xoops/>）の設立がある（井上順孝「宗教リサーチセンターのめざすもの」、京都仏教会会報66（URL：<http://www.kbo.gr.jp/kaihou/66-1.htm>）、1999年）。

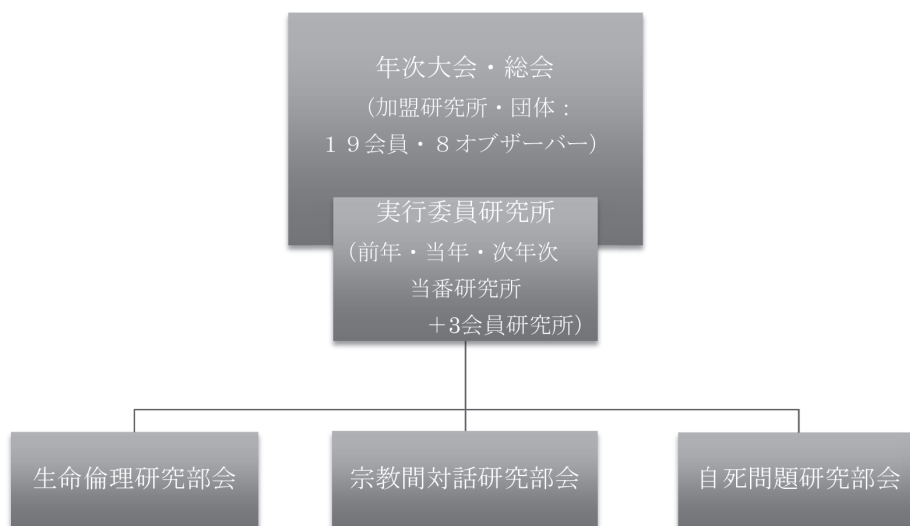


図1 教団付置研究所懇話会の構成

#### 4 教団付置研究所懇話会活動を媒介とした Buddhist-Christian relations

キリスト教徒による懇話会での活動は、年次大会及び研究部会における発表・討議等により把握出来る。ここでは、Buddhist-Christian relations の3つの議題要請事項に留意して、年次大会における活動、次いで研究部会活動について議論する。

##### 4.1 年次大会概要

2002年の懇話会発足以来2014年まで13回の年次大会が開催されている。特筆すべきことは、懇話会に全加盟研究所・団体（会員とオブザーバー）の研究員が年次大会に出席して、活発な議論に参加していることである。従って、この懇話会活動は極めて積極的で且つ効率的な相互連携・意見交換の機会と捉えることが出来る。13回中7回の年次大会で、キリスト教系教団付置研究所研究員による下記のテーマ発表がある：

- 〈第2回〉 宗教研究者が集える領域づくり：「宗教間対話の歴史的な背景」（このメインテーマは第6回年次大会まで継続して実施されている。）
- 〈第5回〉 宗教者である研究者が集える領域づくり：「諸宗教の神秘主義的儀式—キリスト教と密教との比較」
- 〈第7回〉 教師の育成の現状と課題・展望：「カトリック教会における宗教教育担当者養成の課題」
- 〈第8回〉 自死について：「自死という問題とキリスト教」
- 〈第9回〉 現代性へ／からの問い：「世俗と宗教の間—『源氏物語』の洞察から」
- 〈第12回〉 ケアとしての宗教：「カトリックの葬祭と日本文化」

〈第13回〉現代と宗教：「聖書中心主義とプロテスタント的瞑想の試み」

これらの発表テーマから、キリスト教系教団は多様な分野で積極的に発表し、仏教系教団・神道系教団と積極的な議論をしていることが、読み取ることが出来る。

各年次大会ではProceedingsが発行されており、上記の発表内容を把握出来る。多くの有用な年次大会が開催されているが、紙面の都合上第7回年次大会の議論について詳しく議論する。第8回については「自死問題研究会」「生命倫理研究部会」との関係性について見ていく。

## 4.2 第7回教団付置研究所懇話会年次大会

当大会では、代表研究員がそれぞれの視点・立場から、教団内における人材育成のありかたを発表している。発表者はRKK/CARI（新宗教在家仏教）、神社本庁教学研究所（神社神道）、オリエンズ研究所（カトリック）のそれぞれの研究員である。

オリエンズ研究所からは下記の項目についての発表がなされた。

テーマ：カトリック教会における宗教教育担当者養成の課題

- オリエンズ宗教研究所の使命と宗教教育の問題
- 現代カトリック教会の変革と日本の教会：第二バチカン公会議（1962-1965）との関連
- 現在の日本カトリック教会の教師要請の現状と課題：教会における教師、ミッションスクールにおける教師
- 宗教教育がめざす人間とその教師像：どのような人間をめざすのか、どのような教師像が求められているか

キリスト教に関連する事象だけでなく、親鸞聖人について言及しながら、この発表をしている。

全体討論において、コメンテーター（曹洞宗総合仏教研究所研究員）からは下記のコメント・質問があった。

- ①宗教者のこころを形成する教育がなされているが、聖職者とどのようにつながっているか？
- ②日本でキリスト教系の学校はたくさんあるが、(韓国に比べて)なぜキリスト教徒が増えないのか？
- ③(キリスト教の)土着化について：親鸞とか縁起とか仏教に類似点があると指摘しているが、より強力な神様の存在に違和感がある。日本人の持つ宗教性、重層的であり、1つのものを信仰するために他の物を追い出すという発想の希薄な多元性・柔軟性に富む心情と、その神との間の違和感がある。筆者はこの問題が、【ENBCS 議題要請(3)の極めて微妙であったため無視されてきたか、あるいは避けられてきた仏教徒-キリスト教徒 (Buddhist-Christian) の出会いから

誘起された事象】と思う。強力な神の存在を全面的に押ししてきた場合には、日本の仏教界との全面的な対決となる。従って、この事項は **Buddhist-Christian relations**に関連した大きな問題を潜在的に内包している、と筆者は判断している。

④キリスト教が日本の中での市民権を得るためにはどのようなすべきか

上記①-④に対する回答は、以下の通りであった。

- ①司祭あるいは牧師が各司教のもと主として伝道活動をしている。教育は主に、修道会が担ってきた。もっと両者の間で交流して理解し合うべきべきであることが言われている。
- ②信者の数よりも学校で教えられている子供の数が多くことから、教会関係者もカトリック教育に理解を高めて欲しいと教育関係者は思っている。
- ③土着化について違和感があるのは、その通りである。
- ④国民の40%がキリスト教徒である韓国とは国民性の違いもあるのではないかと。日本には日本人の独特な国民性と伝統宗教があるので、キリスト教を簡単には受容出来ないのではないかと判断している。両者を同じ物差しで測れない。日本の文化との対話が十分に深められず、まだ外国の宗教という印象が強いのではないかと思う。

全教団への一般的な質問事項（我が子への信仰の伝え方、後継者養成をどのようにしているのか）があった。キリスト教関係者からの回答は下記の通り。

子供の友達にもクリスチャンは皆無に近く、正しく伝わっているかは自信がない。しかし、不思議なことには、親族の冠婚葬祭になると殆ど100%文句なくキリスト教を受入、大事にしてくれる。日本人の特徴と思うが、人生の節目ごとが重要な意味を持っている。宗教もこのメンタリティを活かす工夫が必要で大切である。そうすれば、礼拝とかミサに参加しなくとも伝わるべきものは伝わるのではと思っている。筆者はこの事項も、【ENBCS 議題要請(3)極めて微妙であったため無視されてきたか、あるいは避けられてきた仏教徒-キリスト教徒 (**Buddhist-Christian**) の出会いから誘起された事象】と思う。

さらに、大学教育の問題（カリキュラム、一般授業と教師資格を取るための授業のバランス、…）が、各パネリストへの質問事項としてあった。キリスト教関係者からの回答は下記の通り。

カトリック教の場合3本立てになっている。1つは教区司祭養成のために、神学校あるいは神学院、2つは大学等における宗教教育、もう一つは諸種のミッションスクールにおける宗教教育。筆者は【ENBCS議題要請(2)の達成事項関連】と考える。この事項は仏教系教団・神道系教団の行の実践と相当異なっていると思う。この相違を認識し、キリスト教系以外の各教団で強化すべき点を明確化出来た。

### 4.3 第8回教団付置研究所懇話会年次大会・テーマ「自死について」

自死問題は教義と深く関わっているので、第7回大会と同様に全参加教団を上げてテーマを分析し、その対応について徹底的な議論を尽くしている（ここでは議論の詳細を割愛する）。この活動が自死問題研究会と連動して、自死を激減させることに貢献したと思われる。また「死の概念」は脳死問題との関係性から、生命倫理問題と密接に関わっている。「日本の宗教教団では、脳死は人の死ではない」とした「いのち・人権・死に対する尊厳」の立場を堅持し、臓器移植問題に対する結論が日本の宗教界で一致している。この事項は、【ENBCS議題要請(2)の仏教徒-キリスト教徒関係(Buddhist-Christian relations)】に関連して達成した成果の一つである。

### 4.4 生命倫理研究部会

当該研究部会は、準備会を経て2005年に発足し、現在までに12回開催されている。懇話会設立前後に多くの宗教教団やその付置研究所が、日本政府へ脳死・臓器移植問題に対する見解・意見書を各個に提出した。このことが設置の契機となった。この研究部会は、加盟研究所・団体が発信した生命倫理に関する諸問題の見解・意見書の情報共有をする場として設置された。前小節で述べたように、生命倫理に関する問題(脳死・臓器移植等)は各教団の教義に関連することであるので、各教団の英知を集結し、徹底的な議論を展開した(その議論の展開は年次大会の項で記載したと殆ど同じであるので、ここでは割愛する)。得られた成果は下記のように日本社会に対して発信されている。この事項は、【ENBCS議題要請(2)の仏教徒-キリスト教徒関係(Buddhist-Christian relations)】に関連して達成した成果の一つである。

2007年以降に数回、当該研究部会の研究員が日本生命倫理学会年次大会パネルで宗教者としての生命倫理に関する問題提起・研究報告を発表している。

また2009年7月8日「臓器移植法」改定を考える緊急院内集会「宗教界からの緊急提言—『脳死は人の死ではない』」が東京・千代田区の参議院議員会館で行われ、8教団(浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、大本、天台宗、日蓮宗、NCC、RKK)の教団代表者が見解を個々に発表した。これらの諸宗教教団(懇話会加盟研究所)のすべては日本政府・国会に対し「脳死を一律に人の死としない」という見解で一致している<sup>34</sup>。この見解・提言は「脳死は人の死ではない」とした「いのち・人権・死に対する尊厳」の遵守のために、下記の警鐘をならしている。

2009年7月の可決の臓器移植改正法は、脳死を一律に人の死と定義している。本人の臓器提供の意思が不明な場合でも、家族の同意だけで臓器提供が可能となった。さらに、提供の年齢条件を撤廃した。蘇生力に富み、脳死判定の困難さから対象外であ

---

34 校成新聞2009年7月19日付。



った6歳未満の脳死判定・臓器提供も可能である。脳死状態でも、心臓は活動し、血液は循環する。肌にぬくもりがある。日本ではこれを“生きている”と見做し、脳死を死と考えない（ないし認めない）人は少なくない。脳死臓器移植の可否について、国民的合意がなく、国会でも死の概念・倫理に対する審議の時間は寡少に過ぎた。懇話会加盟教団は「脳死を人の死」と法律上で規定することで派生する諸問題（臓器売買横行の危惧、脳死判定やインフォームド・コンセントのガイドライン基準の作成、いのちの軽視など）についての危惧を表明している。我々は、宗教的・文化的・倫理的・社会的等の議論を深める努力を呼びかけている。

#### 4.5 自死問題研究部会

当該研究部会は、第8回年次大会（4.3節参照）とその準備会（2009年）を経て2010年に発足し、以来年1回のペースで研究部会を開催している。本部会は自殺（自死）の防止に関する宗教教団の対応案策定のために設置された。当部会での議論（部会設置の経緯・意義・目標・活動案）により得られた成果も又社会に発信されている【ENBCS 議題要請(2)の仏教徒-キリスト教徒関係（Buddhist-Christian relations）に関連して達成した成果】。

日本では、バブル景気後退期（1991～1993年）にも2万人台だった自殺者が、経済成長率が前年比マイナスに陥った1998年（平成10年）に32,863名を記録した。以降、2003年（平成15年）に最悪の34,427名を記録したのを頂点に、自殺者は連年3万人台を記録した。言うまでも無く、自殺は当人のみならず、家族・親族、さらには社会的な悲劇である。我々諸宗教団体は、多くの地域で信徒・信者・会員のカウンセリング等につとめてきたが、自殺者減少のため共同で行動する必要を認識した。

自殺者が多数発生する事態を重く見たのは、行政側も同様である。京都市は懇話会に啓蒙イベントへの協力を要請した(2010年度)。自死は死生観に深く関わることであり、宗教団体の関与が不可欠といえる。しかし通例、日本の行政機関は宗教団体との協働を強く避ける。政教分離規定を厳密に適用しようとしてのことと考えられる。しかしながら、京都市が懇話会に協力要請を行ったことは、我々の活動に対する一般市民からの信頼が醸成されたものと考えられる。懇話会加盟研究所・団体は同市の啓蒙イベント「Life Fes' KYOTO 2010 灯—いのちを想うキャンドルナイト—」に懇話会加盟研究所・団体からメッセージを贈り、キャンドルサービスのための蠟燭の寄付などを行った<sup>35</sup>。

35 京都市の自殺者数の推移については『概要版 きょう いのち ほっとプラン 京都市自殺総合対策推進計画 中間評価及び見直し』、2014年 3 (URL : <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/cmsfiles/contents/0000166/166842/honsatsu.pdf>) を参照。

自殺者は、近年では2009（平成21）年をピーク（32,845名）に減り始め、2012（平成24）年には3万名を割っている。日本経済は2014年にも伸び悩み、必ずしも明るい展望は開けていないのが現状である。にもかかわらず、自殺者数は、2014（平成26）年には25,374名まで減少している<sup>36</sup>。自殺者数の減少傾向に対しては、関係諸氏・諸機関をはじめ懇話会の尽力が相乗して貢献していると思われる。

#### 4.6 宗教間対話研究部会

当該研究部会は準備会を経て、2006年に発足し、現在までに3回開催されている。設置の契機は、加盟研究所・団体のもつ宗教観・倫理観の相互情報共有・自由討議の場の必要性のためであった。

相互の宗教教団が持つ教義（教理）に踏み込んで、信仰観、靈魂観、平和観などについて活発な議論がなされている。当該研究部会の研究員が、懇話会加盟研究所の教団本部参拝・施設訪問、その教団の儀礼儀式に参加したこともある。ここ数年の開催はなく、懇話会における諸宗教間対話は道半ばである。

しかし、加盟研究所の個々は、加盟研究所（教団）へ相互に参詣・教義（教理）について議論するなど、それぞれに交流を深めている。

### 5 まとめ

European Network of Buddhist Christian Studies（ENBCS）からの議題要請は下記3点であった：

- (1) 仏教徒-キリスト教徒関係（Buddhist-Christian relations）に関連して、どうい  
う問題があるか
- (2) 仏教徒-キリスト教徒関係（Buddhist-Christian relations）に関連して、どうい  
う達成した成果があるか
- (3) 極めて微妙であったため無視されてきたか、あるいは避けられてきた仏教徒-  
キリスト教徒（Buddhist-Christian）の出会いから誘起された事象があるか

本稿で議論したように、(1)は現時点では殆ど問題がないと考えている。

(2)については、1960年代より日本において Buddhist-Christian relations は極めて良好であり、現在RKKをはじめとして日本仏教界との対話・交流は極めて盛んである。特にRKKは、国内における組織構築後、庭野開祖の積極的な平和思想に基づき、ロー

---

36 警察庁のプレスリリース「平成26年の月別自殺者数について（12月末の速報値）」（2015年1月15日）（URL：[https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H26\\_tukibetujisatushasuu\\_sokuhouchi.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H26_tukibetujisatushasuu_sokuhouchi.pdf)）を参照。

マカトリック教会等との対話・協力を積極的に推進した。RKKはこの積極的な平和路線の進展に合わせて、その組織・施設・人材をより一層充実させた：立正佼成会大聖堂建立（1964年）；佼成出版社の設立（1966年）とDharma Worldを創刊（1974年5月）；中央学術研究所設立（1969年）と宗教教団附置研究所の結集；庭野平和財団の設立（1978年12月1日）。

更に、(2)の顕著な成果として、宗教教団附置研究所を結集して、1990年代前半に多発した問題（臓器移植の是非を問うことに始まった生命倫理問題、靈感商法問題・地下鉄サリン事件等の反社会的集団による大きな問題）に起因する日本の全宗教者・宗教教団の存立が問われる事態に対して、その解決に尽力したことは特筆に値する。

(3)については、死及び葬儀にまつわる問題がある（第12回懇話会年次大会テーマ「ケアとしての宗教」参照）。恐らくこれらの問題が今後のBuddhist-Christian relationsに関する微妙な問題点・争点として表面化するものと思っている。

## 【謝 辞】

本稿作成にあたって、教団付置研究所懇話会設立に尽力された故幸日出男・NCC宗教研究所長をはじめ、天谷忠央・元中央学術研究所長、幸先生を含む呼びかけ人6名の諸先生<sup>37</sup>に対し心から感謝を申し上げる。

また逢坂雄美・仙台高等専門学校名誉教授と笠松直・同准教授の両氏から本稿作成に多くのご教示を頂いた。藤田浩一郎・中央学術研究所学術研究室長より多くの資料提供を頂いた。武藤亮飛・筑波大学大学院博士課程には示唆に富む多くの情報提供と助言を頂いた。関係者各位の方々からも多くの助言・資料提供を頂いた。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

最後にENBCS in 2015に研究招聘し、発表の場を提供していただいたエリザベス・ハリスENBCS会長、ENBCS 2015日本部会議長であるマルティン・レップ博士に深く感謝申し上げます。

## 【参考文献（脚注に記載していない文献・論文）】

- (1) 田丸徳善「総論「宗教協力」研究の課題と展望」、中央学術研究所編『宗教間の協調と葛藤』、佼成出版社、1989年 7-16。
- (2) 『教団付置研究所懇話会 第1-13回年次大会 プロシーディングス』、教団付置研究所懇話会、2002-2015年。

---

37 雲井昭善・天台宗総合研究センター長、奈良康明・曹洞宗総合研究センター長、石上善應・浄土宗総合研究所所長、佐藤光俊・金光教教学研究所所長、今井克昌・中央学術研究所所長（肩書きは懇話会設立当時）。

- (3) U. DESSI, Religion, Networking, and Social Issues in Japan : The Case of the Kyōdan Fuchi Kenkyūsho Konwakai, *Japanese Religions*, Vol. 35 Nos. 1 & 2, NCC Center for the Study of Japanese Religions, 2010, 87-100.
- (4) U. DESSI, *Japanese Religious and Globalization*, Routledge Studies in Asian Religion and Philosophy Series, Routledge, Germany, 2013.
- (5) 武藤亮飛「万国宗教会議再考—いかにして「対話」は始まるのか」、『宗教学論集』第三十三輯、駒沢宗教学研究会、2014年 3-32。

## 【付 録】

## I 教団付置研究所懇話会設立趣意書（全文）

## 教団付置研究所懇話会の目的

「教団付置研究所懇話会」発足へのお誘い（趣意書）より

今日、私たちは時代・社会の進展にともない、種々の現代的諸課題に直面しています。平和、人権、環境、生命倫理等から家庭・学校教育の崩壊、種々の青少年問題、倫理の荒廃、そして宗教的価値観の喪失など、無視できない問題が山積しています。こうした状況下に、私たちは宗教者としてどう対応したらいいのでしょうか。これはいわゆる既成仏教とか、新宗教とか、神道とか、あるいはキリスト教とかの宗教、宗派の差を超えて、日本の宗教者全員の関心とするところでありましょう。

日本の各宗教付置の研究所としても、それぞれに考え、悩み、何等かの対応を行ってきています。しかし、同様の問題を抱えて努力していながら、同じ宗教者として考えていること、やっていることが、お互いにほとんど見えていません。何か横に連なる機関があり、相互に情報と意見を交換することが出来れば有益であろう、という声はかなり前からありました。この傾向は特に昨年9・11の同時多発テロでいっそう強まったといえましょう。

そこで有志が相集い、平成14年2月4日（NCC 宗教研究所）、4月24日（浄土宗総合研究所）の2回にわたる準備会を経て、「教団付置研究所懇話会」を発足させようということになりました。その趣旨は、私たち教団付置研究所は、現代諸課題にどのような関心を持ち、何をしているのか。それぞれの教義・世界観を基としながら、現代社会に開かれた教団たらしめるべく、どのように努力しているのか。こうした事柄に関して相互に情報を交換し、それぞれの立場を尊重しつつ協力できる可能性を探りたい。そしてこの動きが、教団の差をこえて、日本社会に「真の宗教性の復権」をもたらすことに資するものでありたいと願うものであります。

教団付置研究所、といっても規模の大小、教団との関係、純粋アカデミズムか具体的な教化方法の検討か、など、事情はそれぞれに異なります。しかし、そうした違いを違いとして尊重しながら、日本の宗教者相互の理解を少しでも助長し、宗教者としての協調と連帯を増進する機会となり得れば、と希望しています。

平成14年9月10日

『教団付置研究所懇話会発足準備会』 参加団体

大本教学研鑽所、孝道教団国際仏教交流センター、金光教教学研究  
 浄土宗総合研究所、浄土真宗教学研究、神社本庁教学研究  
 真宗大谷派教学研究、曹洞宗総合研究センター、天台宗総合研究センター  
 天理大学おやさと研究所、辯天宗教理研究室  
 NCC（日本キリスト教協議会）宗教研究所、立正佼成会中央学術研究所

以 上

上記の「教団付置研究所懇話会の目的」は、『教団付置研究所懇話会』発足へのお誘い（趣意書）をもって充てることが「第2回教団付置研究所懇話会」において確認されております。

## II 幸 日出男先生に感謝をこめて

元中央学術研究所所長 天谷忠央

私が、幸日出男先生（元NCC（キリスト教協議会）宗教研究所所長）にお目にかかるようになったのは、所長職に就いてから、毎年京都で開催される「現代における宗教の役割研究会（コルモス）」に出席し始めた1994年のころからであった。

先生は、細身で背が高く私の知るかぎりいつもグレーのスーツに銀髪がよく似合い、穏やかな落ち着いた雰囲気の中にも毅然としておられた、そういうお人柄の紳士であった。

幸先生を思うとき、私には何と言っても、教団附置研究所懇話会の設立に心を砕きご尽力くださったことへの感謝の思い以外にはない。いきさつはこうである。

90年代の日本は、宗教がさまざまな現代的な諸課題に直面した時代であった。社会を驚かすような宗教がらみの事件も頻発した。

繰り返される靖国問題によって宗教界はまともな議論もないまま出口を見出すことができず、また宗教政党の政権参入によって宗教団体と政治との関わりの問題はいつそう宗教界を悩ませていた。

脳死を人の死とする1992年の脳死臨調報告を発端として、生命倫理をめぐる問題は宗教界にとっての大きな課題となったし、靈感商法や地下鉄サリン事件（1995年）など宗教団体による反社会的活動、このいわゆるカルト問題は宗教団体の社会的責任や倫理性が問われ、宗教法人法改正問題にも発展した。

こうした状況は宗教界をあらゆる面で根底から揺さぶることとなり、国民のあいだにぬぐい難い宗教不信を生み出すことにもなったわけである。もちろん宗教界としては、何もせずにただ手をこまねいていたわけではないが、おおよそ自らの教団をいかに守るかで精一杯だったように思う。中央学術研究所としても、やはり同様であった。

このような状況の中で問題の本質は何なのかを私なりに考えたことは、宗教とは何か、また宗教の社会的役割や宗教団体の倫理性など、宗教がその根本から問われているのではないのか。宗教者がそれを十分に気付かないでいるとすれば、宗教自体が危機的状況に置かれることになるのではないのか。しかし、今日の諸宗教が対話と協力の方向に進んでいるとはいえ、宗教者が宗教の役割や宗教の自己改革に向けて根本的な議論を行うのは、さまざまな事情があつてそう簡単ではないことは承知している。しかし、そこにこそ教団附置研究所の本質的な役割があるのではないのか、ということであった。

そのような日々を送りながら、おおくの宗教者や研究者と、直面する諸課題に取り組むための活動や対話・交流を重ねる中で、同じような考えをもつ人がいることを、私は確信した。そして1996年8月の中央学術研究所所報『チャンダナ』に「宗教の危

機と教団附置研究所の役割」と題する小文を載せたのである。

その結論は簡単である。諸課題を克服しつつ宗教の危機を乗り越えて、社会と教団に貢献するための教団附置研究所のネットワークを構築することであった。

どこから手を付けるべきか。重要なことはこの構想を具体的に実現するのに相応しい人である。誰にでもできることではなく、それに相応しい人は必ずいるに違いない。それは決して私ではない。こうしてほぼ3年が経過した1999年6月、新宗連の理事会出席のため神戸に向かう途中、私は意を決し京都のNCC宗教研究所に幸日出男先生を訪ねた。

幸先生にお願いするしかないと思ったのは私の直観であった。事前に何のお話もしていなかったのであるが、先生は快く会ってくださった。短い時間ではあったが、私の思いを率直にお話しした。幸先生のお力で教団附置研究所の結集を図っていただけないかをお願いしたのである。

それまで二人できちんとした話をしたこともなく、元来、研究者でもない私ことなど何もご存じではなかったはずであったが、静かに私の話に耳を傾けてくださった。ややあって先生は、いっさいをご承諾くださり、「宗教界はそれぞれに事情があるわけで、慎重な準備が必要であろう、私なりに誠意をもって進めるのですべてを任せてほしい」とおっしゃったのである。有り難かった。

それからさらに2年が経過したころ、幸先生から約束のことが実現する見通しであるのご連絡をいただいた。2001年のコルモス開催中に、数人の先生方をご紹介くださり最初の顔合わせとなった。

かくして、翌年の2月最初の準備会が開催された。出席した諸先生は、天台宗総合研究センター長雲井昭善先生、曹洞宗総合研究センター長奈良康明先生、浄土宗総合研究所長石上善應先生、金光教教学研鑽所長佐藤光俊先生、それに幸先生と私、2001年12月に定年で退任した私の後任の今井克昌所長の計6人であった。

教団附置研究所懇話会設立の準備は順調に進み、設立大会を天台宗総合研究センターで開催することになった。その年完成したセンターの総合庁舎のお披露を兼ねたいという、雲井先生から会場提供のお申し出があったという幸運にも恵まれたわけである。こうして2002年10月、念願の教団附置研究所懇話会が、13団体の研究所の賛同と参加を得て正式に発足したのであった。

幸先生にお話しをもちかけて3年あまり、幸先生が実現に向けてどれほどお心を砕き、手を尽くしてこられたか、そのほとんどを私は知らない。想像ではあるが、幸先生は時代の趨勢や宗教界の動向に目を向けつつ、機が熟するのをじっと見ておられたのではないかと思う。こうして幸先生は、自分の手柄を誇示するようなこともなさらず、静かに発足を喜んでおられたのを、私は今でも記憶している。

懇話会は現在19団体会員、8団体がオブザーバーとなって毎年研究大会を開催する

とともに、生命倫理研究部会、宗教間対話研究部会、自死問題研究部会の3部会が活動するまでになった。まことにありがたく意義深いことである。

教団附置研究所懇話会の設立に関し、幸先生の最大の功績を称え感謝と追悼を捧げることは当然であるが、この際もう一人を忘れてならないのは、やはり最初からともにご尽力くださった金光教の佐藤光俊先生である。佐藤先生は2012年4月、幸先生より一足先に62歳の若さでご帰幽された。感謝をこめて、お二人のご冥福をお祈りしたい。